2022 高校総体 第11、12日

全国高校総体（インターハイ）第11、12日は7、8の両日、高知県春野運動公園などで行われ、県勢は卓球女子団体の明徳義塾が準優勝を果たした。柔道男子66キロ級の樋口大翔（岡豊）が決勝進出を逃したものの、3位に輝いた。

（28面＝「岡豊の剣道」見せた）

剣道女子団体の岡豊は準々決勝で敗れて5位入賞。高知は男女とも決勝トーナメント1回戦で敗れて8強入りを逃した。岡豊女子の主将岡部凜は、男女それぞれ10人が選ばれる優秀選手に、四国からただ一人選ばれた。卓球女子の明徳・青井さくらは敢闘賞を授与された。

弓道団体は男子の高知、女子の土佐とも決勝トーナメントに進めなかった。

陸上の男子110メートル障害は紺野稜真（山形・九里学園）が14秒57で制した。400メートル障害との2冠。女子100メートル障害は林美希（愛知・中京大中京）が13秒65で、七種競技に続き優勝した。

柔道の男子団体は国士舘（東京）が3年ぶり16度目の頂点に立った。同個人戦は73キロ級で木原慧登（神奈川・東海大相模）、100キロ級で新井道大（埼玉栄）が2連覇を果たした。

バレーボール男子は決勝で東山（京都）が東福岡にストレート勝ちし、初優勝した。

明徳女子 連年準V

女子単 青井（明徳）5位

【女子団体決勝　四天王寺―明徳】四天王寺の大藤から1ゲームを奪った明徳の第1単・上沢依（宇和島市総合体育館＝佐藤邦昭撮影）

卓球

（宇和島市総合体育館）

▽女子団体準決勝

四天王寺（大阪）3（単2－1 複1－0）1 桜丘（愛知）

明徳義塾 3（単3－1 複0－1）2 進徳女（広島）

青井 3（11－9、11－8、11－9）0 福井

上沢茉 2（7－11、11－6、12－10、4－11、7－11）3 東川

青井・白山 2（5－11、9－11、9－11、11－5、11－9）3 東川・工藤

白山 3（11－7、11－5、11－9、6－11）1 工藤

上沢依 3（11－7、8－11、11－13、11－3、14－12）2 藤原

▽同決勝

四天王寺 3（単2－1 複1－0）0 明徳義塾

大藤 3（11－8、11－5、7－11、11－8）1 上沢依

伊藤詩 3（11－9、11－7、9－11、11－9）1 青井

大藤・横井 3（11－7、11－6、11－5）0 青井・白山

（四天王寺は9大会連続26度目の優勝）

▽同シングルス3回戦

青井さくら（明徳義塾）3（11－8、11－4、11－2）0 野々口彩乃（山梨・日本航空）

白山亜美（明徳義塾）3（11－6、11－7、11－5）0 狩野春琴（埼玉・埼玉栄）

▽同4回戦

青井さくら 3（11－6、12－10、5－11、11－3、9－11）2 藤田知子（大阪・四天王寺）

▽同5回戦

白山亜美 3（12－10、12－10、8－11、11－7）1 岩木仁香（神奈川・横浜隼人）

青井さくら 3（11－8、11－4、11－7）0 坂崎愛華（埼玉・正智深谷）

▽同準々決勝

吉松寿莉（熊本・開新）3（11－8、9－11、11－8、15－13、8－11）2 白山亜美

赤江夏星（大阪・香ケ丘リベルテ）3（11－6、10－12、11－4、11－7、5－11）2 青井さくら

▽同決勝

赤江夏星 3（14－12、11－9、6－11、11－7、8－11）2 大藤沙月（大阪・四天王寺）

明徳 宿敵相手に成長の跡

準優勝を果たし、カップや賞状を手に記念撮影する明徳女子チーム

併設中学の1年時から現・明徳女子チームを引っ張る青井、白山、上沢依、上沢茉の「4本柱」にとって、中高卓球界の横綱、四天王寺（大阪）との戦いは特別な意味を持つ。今春の全国高校選抜大会までに5度挑み、そのたびにはね返されてきた。

高校3年生、最後の対戦である全国総体決勝は、またしても0―3。しかし、これを完敗と言ってはいけない。佐藤利香監督は「中学からの6年間、卓球の技術も人としても本当に成長した」と声を詰まらせた。

この4人が初めて四天王寺と対戦したのは、中学2年だった2018年の全国中学校体育大会（全中）準決勝。やはり0―3で敗れているが、主将の青井は「何をしたらいいかも分からなかった」と振り返る。

それが、この日は上沢依、青井の第1、2単が1ゲームずつ取った。上沢依は善戦について「個人戦では絶対やれない相手と試合できたのは、みんなが勝ってここまで来てくれたから」と、明徳卓球部伝統の「感謝」を絡めて説明した。

進徳女（広島）との準決勝は大ピンチだった。第2単と複が敗れて1―2となり、続く白山も第1ゲームを落とした。四天王寺とやる前に負けるわけにはいかない―。白山は「ここは我慢」と3ゲームを連取。同時進行の最終単、上沢依は「焦らず一本一本取るだけ」とフルゲームを制した。この準決勝の2人の粘りだけでも、佐藤監督が話した「成長」の意味が分かる。

決勝は青井・白山の複が大藤・横井の個人複の日本一ペアに敗れ、6年間の戦いが終わった。選手たちの涙は、悔しさだけではないはずだ。志高く努力を重ね、素晴らしいチームに成長した充実感が伴っている。

（井上太郎）

青井 劣勢での粘り光る

【女子シングルス準々決勝】フルゲームの末に4強入りを逃した明徳・青井（宇和島市総合体育館＝佐藤邦昭撮影）

個人単では表彰台が目標だった明徳・青井は、一歩手前の準々決勝で、赤江（香ケ丘リベルテ）にフルゲームの熱戦の末に敗れた。悔し涙がしばらく止まらなかった。

しかし、青井は今大会、もう後がないという状況を何度も粘って、耐えて、しのいできた。胸を張っていい結果だ。

準々決勝。1―2で迎えた、取られたら終わりの第4ゲームで4―7。そこから、相手の強烈なスマッシュを懸命に拾って長いラリーに持ち込み、5連続得点で9―7とし、最後は12―10の粘り勝ち。最終ゲームに望みをつないだ。

「4回戦で同じような展開の試合を勝った。それを思い出したら焦りがなくなった」という。その4回戦は藤田（四天王寺）相手に、1―2からの逆転で勝っている。

劣勢での粘りは素晴らしいものがある。では、なぜ目標の4強に届かなかったのか。「高い球が来た時に、スマッシュでミスをしてしまった」。大チャンスをものにできないと、相手に流れを渡してしまう。

「秋には国体もあるし、卓球は大学でも続ける。この反省を生かして頑張る」。ようやく笑顔を見せ、前を向いた。

（井上太郎）

2022年8月9日高知新聞